

冷酷CEOは秘書に溺れるか？

Rin & Suou

流月るる

Ruru Ruzuki

termity



エタニティ文庫

目次

冷酷CEOは秘書に溺れるか？

5

書き下ろし番外編

冷酷CEOは秘書にプロポーズできるか？

341

冷酷CEOは秘書に溺れるか？

プロローグ

病院には、独特の空気がある。

シャンデリアの煌めく吹き抜けの天井や、クラシック音楽が流れる待合室、所々にバランスよく置かれた観葉植物、壁面に飾られた大きな絵。

新しく建てられたばかりの総合病院は、まるでホテルのような雰囲気だ。

けれど、白衣を着たスタッフや、車椅子に座る患者さん、どことなく漂っている消毒薬のにおいは、否が応でもここが病院であることを知らしめている。

私、関崎凜は見舞い客専用の入り口をくぐり、腕に抱えたバッグを持ち直した。中身は仕事関係の資料と経済誌、経営に関する書籍類だ。

この病院の特別フロアに、私の勤める会社のCEOである溝口さんが入院している。

彼は大手不動産会社を退職した後独立し、今の会社を築き上げた。事業内容は、不動産開発や地域再生、新しいビジネスモデルの提案など。様々な分野でイノベーション事業を手掛けるベンチャーだ。

シャッター街になりかけていた商店街を立ち直らせたり、過疎化が進む地域を再開発したり、売り上げが落ちた飲食チェーン店を盛り上げたり、といったことをしている。

生まれ変わったように活気ついた地域や、これまで以上に売り上げを伸ばした店舗などが出る、その都度マスコミに騒がれるぐらいには知名度がある。

私は数年前に秘書課に配属され、ついこの間までCEO専属秘書だった。

どの会社のトップもそうだろうけれど、CEOである溝口さんもやはり仕事人間で——私は彼の秘書としてそばにいて、健康にも気を配っていたつもりだった。休むだけでは戻らない顔色の悪さに、無理やり人間ドックの予約を入れたのも私だ。

溝口さんは苦笑しながら『関崎さんがそこまで心配するなら』と人間ドックを受診してくれた。

結果、彼はこうして入院することになり、私は彼の秘書として毎週末この病院を訪れては、会社の状況を報告していた。

院内を進み、特別フロアのある階でエレベーターを降りる。いつもはしんと静まり返っているナースステーションが、ほんの少しざわついていた。私は首をかしげながら、いつもと同じようにカウンターで面会者名簿に名前を記入した。

「そんなに素敵な人だった？」

「見るからに上等な男って感じだったわよ。帰る時にでも見てみれば？」

ナースたちがささやき声で交わすその会話で、なんとなく落ち着かない雰囲気の理由がわかった。

見舞い客にイイ男でもいたんだろう。

私の存在に気づいた年配ナースが、わかりやすく咳払いしてざわつく彼女たちを窘める。私は知らぬふりをしてボールペンを置いた。ふと見ると、名簿の教行上に見覚えのある名前があつてドキツとする。

——つい先日会社で、溝口さんの長期休養と新しいトップの就任が報告された。面会者名簿には、神経質そうな字体で、その新CEOの名前が書かれていた。

「出てきたみたい！」

ナースステーションに駆け込んできた一人のナースが、同僚たちに小さく声をかける。彼女たちの視線がカウンターの外に向けられた。

特別フロアのある方向から、一人の男性が姿を見せる。

上質そうな濃紺のスーツに、均整のとれた体躯を包んでいる。きちんと締められたネクタイには一分の隙もなく、硬質な空気がまとわりつく。一瞬で人目を引く存在感に加えて、端正な顔立ち。普段真面目に仕事をしているナースたちの視線を奪うのも領ける男だった。

彼はナースステーションからの視線を感じたようだが、気にしたふうもなく一瞥して

そのまま私の横を通り過ぎていった。

瞬間、私の背中にぞくぞくと悪寒が走る。

会ったのは今日が初めてだけれど、私は彼を知っていた。

写真嫌いだという彼の画像は、インターネットで探しても見つからなかった。でも社内誰かが写真つきの小さな記事を見つけてくれたおかげで、おぼろげながらも風貌を目にすることができたのだ。

また、写真以外の情報はかなり集められた。高校生の頃は全国模試でトップクラスだったとか、剣道の大会で優秀な成績をおさめたとか。留学先の大学でも経済関係の論文で学会誌に載ったとか、ずっと海外で経営コンサルタントとして活躍してきたとかいう、華々しすぎる経歴も耳に入ってきた。

学生時代に数学オリンピックなるものに出場した経験もあるほど数字に強く、ありとあらゆるものを数値化して、データにすることによって経営改善をすすめてきたらしい。彼に救われた企業はいくつもある。

三十五歳の若さで様々な実績を残しているほど優秀なコンサルタントで、イケメンで独身と三拍子そろえば、社内が騒ぐのも仕方がないとは思っていた。それでも私は大半の噂を適当に聞き流し、あまつさえちよっと大げさじゃないかと考えていたのである。

でも――

「あれが、氷野須王……」

実物は、想像以上だ。二十九年生きてきて、こんな完璧そうな男に会ったのは初めてだ。あの男が……今度、我が社のCEOとしてやってくる。

「ナースステーションには一瞬でピンク色の空気が漂ったけれど、私の腕には鳥肌が立っている。

……もしかして、完璧すぎて生理的に受けつけない――とか？

「できるだけ近づかないようにしましょう」

私は腕をさすりつつ、小さく呟いた。

特別室のこげ茶色の引き戸をノックすると、低くやわらかな声で「はい」と返事がある。その声で、私はほんの少し肩の力を抜き、室内に入った。

――大丈夫、思ったより溝口さんの声は落ち着いている。

溝口さんは考え事をしている時、声のトーンが落ちる。機嫌がいい時は明るい。そんな判断をすることも、もうないんだな、と思うと胸がつきんと痛んだ。

さつき氷野須王を目の当たりにして、彼が我が社のCEOとしてやってくるのだと実感してしまったから……

「失礼します。おかげんはいかがですか？」

「こんにちは、関崎さん。体調は大丈夫だよ」

そう言って溝口さんは、私を安心させるような穏やかなほほ笑みを浮かべる。

――つい数ヶ月前まで、五十歳近いとは思えないほど若々しかった溝口さん。黒々とした艶のある髪も、がっしりとした体つきも、出会った頃からあまり変わっていない。わずかに増えた、目元の小さな皺だけが時の流れを感じさせたくらいだ。

けれど今は、その面影が消えつつある。

「ついさっきまで氷野くんが来ていたんだよ。廊下ですれ違ったりしなかったかい？」

私は「いえ」とだけ答えて、持ってきたバッグをテーブルの上に置いた。

溝口さんの入院している部屋は特別室のため、大きなベッド以外にソファセットや簡易キッチンが設置されている。豪華な刺繍のカーテンやソファだけ見れば、この部屋は本場にホテルのような空間だ。

「持ってきた書籍は、こちらの棚にしまっただけ構いませんか？ 資料や雑誌はいつもの場所に置いておきますね」

「ああ、それで構わない。それに……」

溝口さんがなにか言いかけたので、バッグから中身を出していた手を、思わず止める。「会社の資料はもう必要ない。関崎さんがまとめたこれまでの資料も合わせて、氷野く

んに渡してくれるかな」

「でも！」

反射的に口にしたけれど、それ以上は言葉が出てこなかった。だって、わかっていたから——いつか必要ないって言われる日が来るって。

入院して毎週末訪れる私に、溝口さんが苦笑していたのも知っている。

遠まわしに、毎週来る必要はないと言われても、私は『相談したいことがある。報告したいことがある』と食い下がりが病室に来ていた。

私はすが、絶対に溝口さんを見る。

そう、わかっている。

溝口さんの髪に一気に白いものが増えたことも、首筋がや痩せてきたことも、声に張りがなくなってきたことも。

仕事をしている場合じゃない。会社を気にかけている場合じゃない。自分の体を第一に考え、病氣と対峙たいじすることが今の彼には必要だ。

「会社はもう私のものじゃない。氷野くんは、そして君たちに任せた。だから資料は必要ない」

溝口さんの静かな口調に胸がざわめく。

——人間ドックなんて、すすめなきやよかった？ でも、そうしなかつたら病氣は

わからなかった。

とはいえ、こんな形で彼の隣を離れることになるなんて……

唇を噛んでうつぶ俯く。

会社は溝口さんの手から離れた。そして後を引き継ぐのは、あの男——

氷野須王。

「その資料は氷野くんに渡してほしい」

「……はい」

「私を支えてくれたように、彼を支えてくれるかい？ 凜ちゃん」

私は、がばつと顔を上げて溝口さんを見た。

久しぶりに、そう愛称で呼ばれた瞬間——ああ、溝口さんはもう私の上司ではなくなつたのだと、私は彼の専属秘書ではなくなつたのだと思つた。

それじゃあ、今度は、あの男の専属秘書になる？

私がああ男を支える？

……なんとなく、嫌だ。私は溝口さんを支えたくてCEO専属秘書になつたんだもの。今はまだ、溝口さん以外の下につく自分なんて想像したくない。

だからって、今の溝口さんに『わかりました』なんて嘘をつくことも、『あの男を支えるのは嫌です』なんて本音を言うこともできない。

泣きそうな表情を隠して、私は秘書の仮面を張り付ける。

「私にできることは、精一杯努めます。溝口さんも、してほしいことがあったら遠慮なく言ってくださいね」

そして、にっこり笑ってみせた。

私の曖昧な返答に苦笑しつつも溝口さんは「じゃあ、時間がある時にはこうして、お見舞いに来てもらおうかな。入院生活は退屈だから話し相手をしてもらえたら嬉しいよ」と言ってくれた。

……新CEOの専属秘書。命じられれば従うしかないのが会社員だ。

けれどあの男には、できれば近づきたくない気がする。

溝口さんと話しながら、私は心の中でなんとかならないものかと、あれこれ考えていた。

第一章 CEOと秘書の攻防

私が病院で氷野須王と会ってから三ヶ月――

「私！ もう無理です！」

CEO専属秘書が業務を行う部屋――専属秘書室の扉が勢いよく開かれる。そうして

私たちのいる隣室、秘書課の部屋に入ってきた人物は両手で顔を覆って、わあっと泣き崩れた。

……ああ、また。

私は頭を抱えたくなるのを堪えて、自分の仕事を中断した。

氷野須王の着任に伴い、当然専属秘書を誰にするのかという話が上がった。周囲はそのまま私がつけたいと言ってきたが、のらりくらりとかわして今に至る。

社会人としてあるまじき行為だと自覚しながらも、感傷からくる個人的願望を優先させたのだ。

私以外の人が新CEOの秘書になることには、幸い、秘書課メンバーの後押しもあった。なにせ新CEOは病院でナースが騒ぐほどの容貌である。当然うちの女子社員たちも大いに騒いでいた。

高身長でスタイルも抜群。海外生活が長かったせいも、立ち居振る舞いが堂々としており落ち着いている。涼やかな眼差しひとつで空気をしんとさせるところさえ、クールでカッコいいと周囲に言わしめた。

そのうえ、独身だ。

女性たちが目の色を変えるのも無理はない。

だから『私も専属秘書の経験を集みたいです』とか『CEOのお役に立てるなら喜ん

で』といった立候補者がたくさんいた。

そうして最初に選ばれたのは、秘書課の中でも比較的職歴が長く、仕事ができ落ちて着いている綺麗な女の子。

なのに——そんな彼女は二ヶ月前、『私には氷野さんのサポートは無理です!』と泣きながら部屋から飛び出してきたのだ。

残念なことに、それから同じような場面が続いている。

……いや、今回は少し長くもったかな？

私は泣いている彼女の世話を他の人に頼み、専属秘書室に入ると、その隣にあるプレジデントルームへと続くドアの前に立った。

きりつと胃が痛くなる。かといって、秘書課の責任者としてはこの事態を放っておくわけにはいかない。

私は嫌々ながらドアをノックしてから入室した。

「なんの用だ。呼びもしないのに来るな」

パソコンに向かったまま、我が社のCEOに着任したばかりの氷野須王が言った。目が据わっついて見るからに不機嫌だ。なまじ顔立ちが整っているせいで、余計に凄みがある。

ひゆるるーと奴から冷気が漂うのを感じながらも、私は気合を入れて彼の机の前に立った。

「今度はなにが原因ですか？」

「女が泣く原因に心当たりなんか無い。俺は仕事を命じただけだ」

私は机の上に積み上げられた膨大な書類にちらりと目を向けた。おそらく短期間で、あれらの資料をまとめるなり、整理するなりを命じたのだろう。

「あれを一人で行うのは無理です」

「どうやれば遂行できるか考えるところからが仕事だ。給料を払っているんだから、それ相應の対価を求めて当然だろう？」

相変わらずパソコン画面を見たまま、彼は無表情で言い放つ。

「君こそ毎度毎度ご苦労なことだな。俺に文句をつける暇があるなら、君が代わりにあれをやればいい」

いきなり、すつと視線が私をとらえた。

人の心を切り裂くような鋭い視線が、背中に悪寒を走らせる。

………出た、出たよ、殺人ビーム。

蛇に睨まれたカエルのように固まりそうになる。

「関崎。俺は役に立たない人間はいらない。それに無駄口を叩く奴も。さっさと仕事に戻れ」

私は口をパクパクさせて、けれどなんの言葉も出てこなくて、すぐすごとまわれ右をした。ついでに積み上げられた書類を手にして秘書課に戻る。

大量の書類を自分の机の上に置くと、まだ涙目の彼女が「関崎さん……すみません」と謝ってきた。

私は首を横に振り、それらの書類を手早く秘書課のメンバーに振り分ける。

書類の一番上に貼られていた付箋には、綺麗だけれど神経質そうな字で締め切り日が書かれていた。

『十日以内に』という指示があるからには、それまでにデータ化しろということだろう。「CEOの要望に応えるのは秘書の役割だけど、一人でこなさなくていいのよ。みんなで手分けしましょう。水野さんだって、一人でやれって命じたわけじゃないんだし」

秘書課のメンバーは誰もが一度は水野須王に泣かされている。

敵が外部にできると身内には結束力が生まれるものだ。みんな渋々ながら私が振り分けた書類を受け取りにきてくれた。

「関崎さん、やっぱりこれ以上、専属秘書を務めるのは無理です。私、プレジデントルームの真横にあるあの部屋で、一人で待機できません」

……だよね。

私はなにも言えずに、ため息だけをついた。

* * *

「秘書課、撃沈だった？」

同期で人事部に所属する武井礼香たけいれいかがサラタをつつきながら話を切り出してくる。

お昼休憩の今、私たちは会社近くにある穴場の洋食屋に来ていた。社内に休憩スペースはあるが食堂はないため、こうして外へ出てランチの間に情報交換をする。

いや、互いの愚痴をこぼし合うのだ。

「うちだけじゃないでしょう？ どの部署もカウンターパンチくらっているって聞いたけど」

「そうなのよねえ」

——水野須王は着任してすぐさま、様々な事柄を各部署に命じた。

経理にこれまでの経営収支報告を、人事には各自の業務成績の提出を、プロジェクト統括部にいたっては、今進行中のプロジェクトだけでなく過去のものまで報告するよう言ったらしい。

水野須王が来始めた数日間こそ、女子社員たちは憧れの眼差しで奴を見ていた。それはもう「え？ ここ会社だよね？」と言いたくなるほどの騒ぎで、女性というものはい

くつになっても、たとえ恋人がいても「イイ男」には目がないのだと改めて教えられたものだ。

でも奴は一瞬で、そんな彼女たちの目を覚まさせた。

最初に秘書についた子には『役に立たない秘書はいらない。むしろ邪魔だ』と言いつたのである。

華やかな受付嬢がモーションをかけた時も、『ここは会社だ。男漁りなら別でやれ』と冷淡に告げた。

それはそれはドスの効いた低い声で、ものすごく冷たい視線で、周囲が震え上がるほど威圧感を与えながら。

それらを目の当たりにした女子社員たちが、そそくさと逃げ出したのは言うまでもない。

言い方が冷たい、優しくない。さらに仕事面では要求が高すぎて対応できない。できないと呆れたような目で見られる。

我が社の新CEOは冷静、冷酷、冷淡……だと評判が立ち、今では社員の間で彼の名前をもじって、『アイスキング』と呼ばれている。

「まあ、それでもわざわざうちの会社に来てくれた救世主だから、指示には従わざるを得ないんだけど」

礼香は肩をすくめて呷く。

——そうなのだ。

彼が日本の、それもうちのようなベンチャー企業に来たのは奇跡みたいなものだった。どうやら溝口さんと個人的な繋がりがあったようだ。

日本で仕事をする気があるなら我が社でとか、望み通りの待遇を用意するからぜひうちへといった引き合いが各所からあったと聞く。

要は、うちにはもつたいない人だということである。

私としては、熨斗をつけて他社にお譲りしたい気分なのに。

「そうだけど……もつと穏やかな言い方なりやり方なりをすればいいのに」
私はサラダのミニトマトに、ぐさっとフォークを突き刺した。ぐちゃっとつぶれて果肉が飛び出す。

「仕事もできるし能力もあるんだらうけど、人としてどうなの？　って感じ。会社のトップに立ったんなら、データとか数字ばかり見ないで、人を見なさいよ！　社員を見な

さいよ！　溝口さんが作り上げた会社なのよ！　ぐちゃぐちゃにしないでほしい！」
私がつぶれたミニトマトを口に放り込むと、パスタのお皿が運ばれてくる。

「凜は溝口フリークだもんねえ」

礼香は「おいしそう」と続けながら、ペーコンときのこのトマトソースパスタをフォ

クに巻き付けた。

——私にとって溝口さんは、我が社のCEOというだけではない特別な人だ。私が溝口さんと知り合ったのは十歳の時。

その頃の彼は三十歳で、不動産会社勤務のサラリーマンだった。

我が家は昔からの家業を引き継ぎ、商店街で小さな呉服屋を経営している。

けれど、近隣に大きなショッピングモールが建設されたことで、昔ながらの商店街は人足が途絶え、経営が悪化して廃業を余儀なくされる店が続出した。近所の顔見知りも引越していき、シャッターが閉まったままの空き店舗が増えていく。その頃、商店街の代表を務めていた父は夜な夜な話し合いに駆り出され、疲労感に苛まれていた。

みんなが途方に暮れていた中、商店街を訪れたのが溝口さんだった。

土地を売ってマンションを建てれば良いなどと言ってきた不動産屋が多かったから、父は最初、大手不動産会社に勤めていた溝口さんも同類だと決めつけて怒鳴って追い出した。

けれど彼は、これまでの人たちとは異なる提案をしてきたのだ。

『商店街を蘇らせましょう』と。

商店街の人たちは、思いもなかった提案と、彼のプレゼンテーションに、瞬く間に魅了された。陰鬱としていた会合は活発な議論の場となって、みんなが商店街の再開発

に意欲を燃やすようになったのである。

父にも活力が戻った。

商店街の代表だった父と彼とは、会合の後、酒を酌み交わす仲に。そして私たちは家族ぐるみの付き合いを始めた。彼には奥さんと私より八歳下の息子がいて、商店街が生まれ変わって活気づくまでの数年間、交流が続いた。

私が高校生になると同時に、彼は『もっと支援活動の幅を広げたい』として独立し、起業したのが今の会社だ。

私にとって溝口さんは、生まれ育った商店街に笑顔を取り戻してくれた魔法使いのような人。

彼の手で救われていく町やお店を見ているうちに、私は彼への憧れを強くしていき、気がつけば淡い想いを抱いていた。

——私も誰かを笑顔にする仕事がしたい。

溝口さんのそばで、彼を支えながら、彼の夢を一緒に叶えていきたい。

大学生になると彼の会社に無理やりバイトとして押しかけ、将来はここで働きたいとワガママを言った。入社試験の面接の日の、溝口さんの仕方なさそうな笑みも優しい眼差しも覚えていた。

少しでも彼の力になりたくて、手助けしなくては頑張ってきた。

そして数年前に、ようやく秘書として直接彼を支えられる場所に来た。

溝口さんの専属秘書でいることが、彼のそばにいられる唯一の方法だったのに——
「それで……次は誰が生贄になるの？」

礼香に聞かれて、私は眉根を寄せた。

そうなのだ。今日の子が秘書課の最後の砦だった。けれど彼女も、脱走してしまった。
つまり秘書課にはもう対応できる人材が残っていない。

「もう、いつそ礼香やってみない？」

そうだ。

この際、秘書課の人間でなくてもいい。あの男とやり合える人ならウェルカムだ。

礼香は口元をナフキンで拭くと、にっこりと綺麗に笑った。

「丁寧に断りたいします。どんなに顔がよくてスタイルがよくて頭がよくて仕事ができても無理ですから」

ことさら丁寧な口調で、息継ぎもせずに言い放つ。

「氷野さん狙いの女子社員とかいない？」

「着任当初ならともかくねえ、そんな強者なんているかなあ。超肉食女子とか？ いや、それはむしろ、氷野さんが嫌がりそう。あれは多分、女嫌いだもの」

……女嫌い。

礼香のコメントに心当たりがありすぎて、私は顔をしかめた。

「エレベーターで乗り合わせた時に挨拶しても、一瞥するだけで応えないし。近づくと眉間に皺を寄せているし。まだ、男性社員のほうが彼とスムーズにコミュニケーションを取れている気がするのよね」

「やっぱり、礼香もそう思う？ そんな私的な感情を仕事に持ち込まないでほしいんだけど」

私はフォークをぐるりぐるりまわして、アスパラと生ハムのクリームパスタをすくい上げた。

——礼香の言う通り、氷野須王は相当な女嫌いだと思う。その証拠に、奴は着任直後、お茶出しをした秘書を追い出して『自分でやるから部屋に準備してくれ』と言った。だから私が、あの部屋にティーセットやコーヒーメーカーを設置した。

スケジュールを確認しに行けば『自分で確認するから必要ない』とバツサリ。

資料を届けに行けば『重要度別にボックスに入れておけ。俺の都合がいい時にチェックする。終わったものはこちらへ置いておく』とのたまった。

ことごとく秘書を排除しようとしているのが見て取れた。

『『最終兵器』を投入するしかないかな』

『『最終兵器』ってなによ！』

眩きに反応した礼香に、私は悪人顔でふふと笑みをもらす。
 「凜、顔が気持ち悪い」と言われたけれど構わない。
 そう、もうこの際、秘書課の人間でなくてもいい。
 私が持つ、とっておきの権限を使って采配さいはいさせていただきますしよう！

* * *

秘書課で働く者たちは、会社の経営を担になう上司を支えていくんだ！ という気持ちが強強いい。

少しでも役に立ちたい、必要とされたい、そんな想いが生まれる。

専属秘書なんかになれば尚更だ。

だから秘書課の女の子たちはみんな、なんとか『アイスキング』の役に立とうと張り切切って、多すぎる業務を一人で抱え込み、耐えられなくなった。

これまでの奴の仕事のやり方を見ていると、『自分の役に立ち、ほしい情報を得られ、自分の言う通りに動く者なら誰でもいい』といったスタンスである。

さらに命じてくる仕事量も多い。

専属秘書一人でこなせるものではないのだ。

だったら、専属秘書はいつそ伝達役に徹して、秘書課全員で仕事をしたほうがいい。秘書の仕事などにも知らないほうが、むしろ伝達役には徹しやすいに違ちがいがない。つまり私は、秘書課以外から適任者を選出しようと考えたのである。

その仮説を周囲に力説し、なんとか同意を得た。そして『最終兵器』を投入して数週間――

「あの！ 取引先へ手土産てみやげを用意するように言われました。それから、この年度のデータをそろえてまとめてほしいそうです。あと、この書類の準備も頼まれました！」

専属秘書室から飛び出してきた彼女の名前は大川おおかわひまり、通称『ひだまりちゃん』と呼よばれている、我が社の元受付嬢だ。

そう、彼女こそが私の『最終兵器』、社内随一の癒いやすし系女子である。

――実は私には特技がある。

父が商店街の代表をしていた関係で、小さい頃から我が家にはいろんな大人が出入りしていた。たくさん大人の大人を見ていると、人の相性や力関係がだんだんわかってきて、『この人とこの人が一緒にやればうまくいきそうだな』とか『この人とこの人はダメだけど、こっちの人を入れたらバランスがいいかも』とか閃ひらめくようになったのだ。

学校生活でも、そういった自分の勘がどこまで通用するか常に試していた。

学校ではグループ活動が多い。グループ間でトラブルが起きると、私はさり気なく人

を誘導してそれらを解決したり、活動性の高まるグループ編成を提案したりした。

この会社に入社してからの数年間は、仕事を覚えるのに精いっぱいだったけれど、慣れてくると人間観察ができるようになる。

私は、溝口さんに社内の情報をスムーズに伝えるために、社内の人間関係から業務内容まですべてを把握するよう努めた。

そこで気づいたことを彼に伝えていつているうちに、人事関係のオペレーターを任せられるようになったのだ。

当時の人事部長は、私の提案に胡散臭うさんくさそうな目を向けていたけれど、いつもトラブルを抱えていた部署が円滑にまわるようになったり、思いもしない能力を発揮する社員が出始めたこと、少しずつ認めてくれた。

溝口さんの専属秘書については、新入社員の配属先を決める場にも同席していた。彼が退任した今、私はその場でメインに動いている。

氷野須王の専属秘書を決める際も、私は任命権を与えられていた。着任前に彼と話す機会はなかったの、彼の経歴や雑誌などの記事から得られた情報を考慮して最良と思える人選をしたつもりである。

だが、選んだ社員がごとごとく部屋から泣きながら飛び出してくる有様ありさまだ。
……まさか秘書課が全滅するとは思わなかったんだよね。

そうして最終手段で見つけたのが彼女、大川ひまりだ。

ひだまりのような温もりを感じるよな、と誰かが言ったことから、『ひだまりちゃん』と命名された彼女。

ふんわりした髪も、小柄な体形も、優しく穏やかな性格を表すような顔立ちも、とてもかわいらしい。

彼女を受付から離れたことで、社内だけでなく社外からも嘆なげきの声が聞こえただけ、背に腹は替えられない。

最近では、異動先がCEO専属秘書室だと知った者たちから、『アイスキング』の氷を溶かすのは『ひだまりちゃん』だけだ！と期待もされている、はずだ。

ひだまりちゃんは、専属秘書を打診した当初『私にはなんの資格も経験ありません！お役に立てるかどうかわからないし、自信もないです』と、不安そうだった。

私は『氷野さんが求めているのは、自分の仕事のサポートをする人材なの。でも専属秘書一人で対応できることじゃないから秘書課全員で取り組みたい。氷野さんの要望を私たちに伝える伝達役になってほしい』とお願した。

伝書鳩でんじゆのような仕事ならやりたくないとお断りを受ける覚悟もしていたけれど、お通夜のように沈んだ秘書課の雰囲気と同情してくれたのか、彼女は『わかりました。言われたことは忠実にやるように頑張ります』と引き受けてくれた。

——こうして、ひだまりちゃんが氷野須王の専属秘書になったのが数週間前。私は今日も彼女からの伝達事項に、手の空あいている秘書の子を探して仕事を振り分ける。そしてひだまりちゃんには取引先の確認をして、手土産てみやげ一覧の資料を見せた。

彼女の今のメイン業務は伝達係だが、少しずつ秘書としての仕事を覚えていけばいい。いずれ彼女も自分でできる仕事は自分でこなし、対応できない時は他の人に手伝てでんってもらうという方法を取れるようになるはずだ。

私は氷野須王のスケジュールをタブレット端末で確認して、他にも手土産てみやげの用意を依頼される可能性がないかチェックした。

「いつも関崎さんに頼りっぱなしですみません。本当はこういったことを自分でできるようにならないといけないんですよね……」

しゅんとした様子で、ひだまりちゃんが呟いた。

ああ、太陽に雲がかかったよ。

『ひだまりちゃん』はいつもぼかぼか、にこにこ笑顔が似合っているのに。奴の冷気にあてられて凍っていた私たちを暖めてくれたのは、あなたなんだよー！

「大川さんは一生懸命頑張っているし、私たちは助かっている。仕事はゆっくり覚えればいいから、ね」

——私に関わっていた新入社員の配属決めの目処めどが立ったので、自分の業務にも余裕ができた。そのため社内でも再度、彼の専属秘書には私がつけばいい、という声が出ているようだけれど聞き流している。自分勝手なのは承知しているが、できれば、このままひだまりちゃんに継続してもらいたい。

彼女は氷野須王に意見もしなければ口答えもしない。あくまでも伝達係に徹して仕事をしている。

だから彼は怒鳴ることもなく、『役に立たない』と追い出すこともなくなって、ようやく秘書課も落ち着き始めたのだ。

秘書課のメンバーも、彼女のサポートを快く引き受けてくれている。おかげでうまくまわっていると思う。

だから、これでいい。
でも——

私は奴のスケジュールを見て、眉をひそめた。当然ながらスケジュール管理は本人がしている。彼は仕事ができるし、処理スピードも速い。能力があるからこそ、効率よく仕事を組み込んでいるんだろうけれど、それでもこのスケジュールはきつきつで、余裕がないように見える。

CEOとして着任した気負いからか、急激に社内の変革に取り組んでいるためにそうなってしまうのかもしれないけれど。

もし私が専属秘書としてついていければ、嫌がられるとわかっていても苦言を呈するだろう。

車で移動する間に食事をとったり、仮眠の時間を確保したり、少しでも休養がとれるような提案もする。……なんて、思い切り私情から、その役を避けておいて勝手すぎるけれど。

ひだまりちゃんは『氷野さんは忙しそうですね』と言うけれど、特に気にはしていないようだ。

そこはきつと配慮が足りない部分かもしれないが、少し前までまったく違う課にいたのだから仕方ないこともある。

……ひだまりちゃんにそれとなく進言する？ まあ、でも彼女がそんなことを言ったら奴は嫌がりそう。きつと『余計なお世話だ』と冷たく突き放すに違いない。

「……さん？ 関崎さん？」

ひだまりちゃん呼びかけに、私ははつとする。

「あ、ごめんね。えーと、日持ちのする手土産をいくつか準備しておきましょうか？もしかしたら他にも、氷野さんから依頼があるかもしれないから」

「はい。わかりました」

ひだまりちゃんはメモを取りながら、真剣に資料を見てスケジュールと照らし合わせている。

——『アイスキング』は私の配慮なんか必要としない。

だから、せめて彼女がそばにいることで、癒やされればいい。
過密なスケジュールを見ながら、ほんの少しだけそう思った。

* * *

取引先との会議を終えて部屋に戻ると、俺——氷野須王はその部屋の有様にふっと息を吐いた。

プレジデントルームの前の住人である溝口さんの趣味か、この部屋はシンプルでモダンだ。

ウォールナットの机や書棚をはじめ、全体的に木の温もりを感じさせる家具で統一されている。

綺麗に整理整頓されていけば、センスのいい設えだ。

なのに、今はその面影もなく雑多に散らかっていた。

つい数週間前までならば、専属秘書が俺の留守の間に気を利かせて片づけていただろう。

でも今回、俺についた秘書はかなり配慮に欠けているようだ。

元受付嬢で秘書経験など皆無だと聞いていたし、質問も言い訳も一切せずに、言われたことをこなしている分、今までよりも扱いやすいとは思っていた。

けれど、この部屋の状態を見ても放置し続けるなんて、かなり神経が図太いかもしれない。

ため息をつきながらスーツの上着を脱いでハンガーにかけると、机の上にそろえられた資料に気づいた。

「大川」

前室で待機しているはずの秘書を呼ぶと「はいっ」と上ずった声が出て、おずおずといった風情で大川ひまりが姿を現した。

「この間頼んだ資料、もうデータ化できたのか？」

かなり大量の資料を、大川の机の上に置いていたはずだ。

締め切りは十日以内にしていたのに、三日と経たずに仕上がっている。

「あ、まだすべてそろったわけではありません。優先順位の高いものから取り組んで、できあがったものをそちらに置いています。パソコンにもデータを転送しています」

資料を手にしてざっと目を通したところ、彼女の言う通り確かにすべてがそろっているわけではなさそうだ。

だが、締め切り日を伝えただけで、優先順位など決めていなかった。

「俺は優先順位なんて指示していなかったはずだが」

「関崎さんが判断してくださいました」

大川は悪びれもせず、にっこり笑って告げる。

「……また、関崎か」

「はいっ！ 水野さんに依頼されたものは、すべて関崎さんの判断を仰いでいます。私一人では到底できませんし、関崎さんはものすごく優秀ですから！」

秘書課の他のメンバーに仕事を割り振っているのも関崎さんです！ と彼女は張り切って続ける。

大川ひまりには専属秘書としてのプライドなど微塵もないのか、そう素直に言ってくる。

これまでの秘書たちは、自分ですべてを抱え込んで、できなかった、難しかったと弁解して泣き出し、この部屋を飛び出していった。

そのたびに、理由を尋ねにきていた彼女を思い出す。

溝口さんの元専属秘書であり、秘書課の中心人物。

俺は大川が用意した書類を置き、その隣にあった新入社員の配属先を記した資料を手にした。

人事部長が主体となっているはずだが、責任者の欄には「関崎凜」の名前も入っている。資料に名前がない場合もあったが、どの部署のどの案件においても彼女の存在は感じできた。

この会社において、裏で采配をふっているのは彼女に違いない。

なんとなく確信を持ち、嫌な気分になる。

これだけ秘書が途中交代しても、関崎凜自身が俺の秘書につこうとする気配はない。

秘書課が全滅して、元受付嬢まであてがってきたのだ。

どことなく挑戦的なものを感じて不快になる。

——肩までの真っ直ぐな髪にノンフレームのメガネで、華やかさの欠片もない女。真面目さだけが取り柄のような彼女の雰囲気は思い出せても、顔立ちまでは浮かばなかった。

「あの……」

「なんだ」

いちいち、びくっと怯えるなど言いたいけれど、大川のふんわりとしたやわらかな外見は、それを躊躇わせる。

綿菓子みたいな呑み応えのなさが、なんとなく俺に苦手意識を抱かせる。

「関崎さんを、秘書になさろうとは思わないんですか？」

どうやらこの綿菓子嬢も、関崎凜を慕っているようだ。

俺は緩く腕を組み、彼女に向き合った。

「仕事さえしてくれるなら、秘書だろうが元受付嬢だろうが構わない。どうやら大半の仕事は彼女がこなしているようだが、君を伝達役に置くくらいだ。俺の秘書をする気なかならないだろうか？」

「関崎さんは、新入社員の研修を担当してお忙しかったからだと思います！ 最近はそれも落ち着いたので、きつとお願ひすれば」

俺は、じろりと綿菓子嬢を睨んだ。

彼女がびくっとして口を噤む。

「俺が願ひするのるか？」

「あの……いえ、言葉間違えました。申し訳ありません……」

直接関わってはいないのに、俺のまわりには常に関崎凜の存在がちらついている。

それでいて本人は、俺に直接対峙してきたりはしない。

そんな胡散臭い女を、そばに置く気になるわけがない。

「もういい。仕事に戻れ」

彼女はすんなりまわれ右をした、と思ったら、ふたたび俺に向き直った。

「あの……」

「まだなにかあるのか？」

「関崎さんが……このお部屋の掃除の許可を得たほうがいいと……あの、片づけてもよろしいですか？」

彼女がちらりと部屋全体を見まわした。

関崎が指摘しなければ、自分から言い出すことなどなかった様子がありありと感じられる。俺はため息をついて「俺の留守の間に片づけておいてくれ」と答えた。

* * *

なにをしても、うまくいかない日というのがある。

最初にケチがついたのは家を出る間際にストッキングの伝線に気づいたことだった。

それで、いつもより遅めの電車に乗る羽目になり、さらにその電車がトラブルで遅延した。慌てて秘書課に飛び込んだ途端、課の人たちが待つてましたとばかりに駆け寄ってくる。

「関崎さん！」

「メールもして電話もしたんですけど、気づきませんでしたか？」

「大変なんです！」

それぞれに矢継ぎ早はやに話されて、思わず後退する。

「みんな、落ち着いて！ どうしたの？」

「大川さんがお休みなんです！」

「風邪をひいたみたいで、連絡がありました」

「どうしましょう！」

私が最初に思ったのは『ああ、ひだまりちゃん風邪ひいちゃったんだ。大丈夫かな？』だった。

その後、みんなの慌てぶりに、つまり彼女がお休みしたということは、専属秘書がいないということだと気づく。

私の表情の変化を、彼女たちも敏感に察知したようだ。

「私、今日は他の役員の方のお手伝いがあります！」

「私も早急に処理しなければならぬ仕事があります」

「私……私には無理です！ すみません」

彼女たちに縋すがるように見つめられて、私はなにも言えなくなつた。

新入社員の研修も終わり、彼らの配属先も決まったので、私には余裕がある。

「……今日は私が氷野さんにつきます。大川さんが明日以降もお休みするようなら、また検討します」

「ありがとうございます！」

彼女たちは声をそろえて頭を下げると、ほっとしたようにほほ笑んだ。

秘書課の人間の反応としてはどうかとは思うけれど、三人とも奴に泣かされてきたのだ。気持ちにはわからないでもない。

慣れない秘書業務に、気の休まる時間などなかったひだまりちゃんが体調を崩すのも仕方がない。

私は自分の机に向かい、まずスマホをチェックした。

彼女たちの慌てぶりが窺える着信履歴やメールの内容に苦笑する。

それから、彼のスケジュールを確かめる。

今日は、午前中は社にいるが午後からは外出する。ついでに明日の予定も見ると、相変わらずの詰め込み具合だ。

私はとりあえず、プレジデントルームに向かった。

まだ彼は来ていないようだったので、まずカーテンと窓を開けて空気を入れ替えた。

この間この部屋に資料を置きにきた時は、その散らかりぶりに驚いた。それについてひだまりちゃんに聞いたところ『最初に、余計なことはすると言われたので、お部屋

の掃除はしていません』とあっさり答えられた。

あの有様を放置できるひだまりちゃんにも驚いたけれど、あれだけ散らかしても指示しない彼にも呆れた。

今は、さすがに彼女の手が入ったのか、雑多な感じではあるものの散らかってはいない。

——プレジデントルームの家具は、溝口さんのお気に入りなものばかりだ。そしてこれらの家具は、今もそのまま使われている。

主が変わったことで起きた部屋の変化と、そんな中わずかに感じられる溝口さんの名残に、私はちよつとだけ複雑な気分になった。

氷野須王が余計なことをされると嫌がるタイプであることはわかっている。

でも、私が専属秘書だった頃、プレジデントルームを整えるのは朝一番の私の仕事だった。

机の上やセンターテーブル、書棚を雑巾で拭く。

ファイルを整え、各社の新聞や雑誌を並べ、観葉植物に水をやり、ゴミ箱は空にする。その後は給湯室で、コーヒーマシンの準備を行う。

上司が不快になるようなことは、すべきじゃないとわかっている。

そう思いながらも、あえて私は溝口さんの時と同じように部屋を整えた。

——文具を置く位置が違う。部屋に残る香りが違う。溝口さんがこの部屋に戻って

くることはない。

『おはよう、関崎さん。今日も一日頑張ろうね』

そう声をかけられることもない。我知らず、涙が込み上げる。

「ここで、なにをしている?」

突然声をかけられて、私はびくっとして振り返った。

ほやけた視界に慌てて瞬きをして、咄嗟に頭を下げた。

……ルーティンをこなしているうちに感傷に浸りすぎた!

「おはようございます。今日は大川が病欠ですので、私が隣室に控えます。御用がありますらいつでもお申し付けください」

無作法は承知のうえで言い逃げすべく、そのまま彼の横を通り過ぎようとした。途端に腕を掴まれる。

「この部屋を整えたのは君か?」

低く凄みさえ感じる声に、ぞわつと背中に寒気がする。

……やっぱり余計なことするんじゃないか!!

「申し訳ありませんでした!」

反射的に謝罪する。私は頭を下げたまま『余計なことはするな』と言われるのを覚悟した。

けれど予想に反して彼は無言だった。ついでに私の腕も掴んだままだ。

彼の手に力が込められているわけじゃないけれど、振り払うことはできないし、やりわりどけることもできない。

恐る恐る頭を上げると、彼は大きな窓の外をほんやり見ている。

この部屋はオフィスの上階に位置するうえに、他のビルに視界を遮られることもないため、外の景色が見渡せる。

溝口さんは、いつも都会の街並みと空を眺めて、『今日はいいい天気だ』とか『雨が降りそうだね』などと呟いていた。

今、外を眺めている氷野須王の横顔は、どことなく和らいで見えた。

……こんな表情もするんだ。

きつと彼は、この窓から見える景色を初めて見たのだと思う。

ここの窓だけはブラインドではなくカーテンをひいてある。

厚手のカーテンは開けても、レースのカーテンまでは開けなかったに違いない。

するりと腕が離されると同時に「昨日頼んでいたものはできていますか?」と聞かれる。私は我に返り、「すぐに確認します!」と答えてその場を去った。

彼に資料を渡し終え、CEO専属秘書室の席につく。

久しぶりにCEO専属秘書室に来たせいで、私はそわそわと落ち着かなかった。この場所に私がいた形跡などほとんどない。引き継ぎのために準備したファイルが一番上の引き出しに入っていることが唯一の名残ともいえる。

机の上のリンゴの形の付箋が、ひだまりちゃんらしくてかわいい。まず初めに私は、彼のスケジュールを再度確認する。

数日先までびっしり埋まっている内容に、もう少しなんとかならないものかと思案する。スケジュールはいまだに彼が自分で管理していて、わずかな隙間にも仕事を入れていくようだ。

彼から指示がない限り勝手なことはできないので、私は頭の中だけでこっそりスケジュールを組み直した。いくつかの業務の時間帯をずらして調整し直せば、空き時間が作れそうだ。うまくすれば休日も確実に休みを取ることができる。

けれど、彼がそれを望むかはわからない。

スケジュール確認を終えた後は、各プロジェクトの進行状況をまとめ直す。

——溝口さんも精力的に仕事をこなす人だった。それぞれのプロジェクトからは随時報告がなされていたけれど、忙しい彼が短時間で進捗を把握できるように、私はそれを見やすく一覧表にしていた。進行状況に遅れはないか、懸念材料はないかなどをチェックしたり、すでに終了したプロジェクトのアフターについても知らせたりしていた。

身に付いたルーティンとは恐ろしいもので、誰に提出するでもないのに、私は今でもそれらの作業を続けている。

今日の分もまとめ終えたところで、バタバタと扉の外が騒がしくなった。そうかと思えば、ノックと同時にドアが開けられる。

「氷野さんは？」

プロジェクト統括部長が顔色を真っ青にして私に問うた。

その直後、私の表情で彼が部屋にいることはわかったらしく、私の答えなど待たずに慌ただしくドアを叩いた。そして、中からの返事を聞いてすぐに飛び込んでいく。

私は椅子から立ち上がり、ドアのそばに近づいた。

よほど慌てていて閉め忘れたのか、隙間が数センチ開いていて、二人の緊迫した声が聞こえてくる。

あんな統括部長の表情を見たのは、溝口さんの退任が決まった時以来だ。なんらかの問題が起こったに違いない。

「どうしてそんなことになった！」

「申し訳ありません。すべて私の確認不足です！」

氷野須王はそれ以上、声を荒らげたりはしなかった。

多分、怒鳴るよりも先にしなければいけないことがあると思ったのだろう。

感情を押し殺した低い声で「先方には直接俺が行く」と言った後「関崎！」と呼ばれた。私は「はい！」と返事をする、反射的にドアから離れて、盗み聞きがバレないようにする。

「すぐに飛行機の手配を！ それから今日以降のスケジュールをすべて調整してくれ」行き先、人数、宿泊先の手配を矢継ぎ早に命じられる。

私は、行き先からどのプロジェクトでトラブルがあったのかすぐに気がついた。

地方の寂れた温泉旅館街の再生プロジェクトだ。

建物の老朽化に伴う観光客の減少、オーナーの高齢化に後継者不足。リフォームしようにも銀行からの融資がなかなかおらず、いくつかの旅館が廃業に追い込まれている。

地域の再開発事業と併せて行うことで、官民一体のプロジェクトになる予定だった。

資金面では助かるけれど、行政に対して、提出すべき書類や許可を得なければならぬことが多く、手間は格段に増える。

担当チームは行政書士と連携して慎重に進めていたはずだが、そこでもかトラブルが起こったようだ。

「私もすぐに同行の準備をいたします！」

統括部長はそう言うと、来た時と同じぐらい素早く部屋を出ていった。

私も秘書課の他のメンバーに、すぐに飛行機の手配をするよう内線で伝えた。同時に

さつきまで作っていた、各プロジェクトの資料も印刷する。

「今日以降のスケジュールに関して優先順位はありますか？」

「いや。先方に合わせてもらって構わない」

「失礼ですが、出張の準備はご自分でなさいますか？」

「自宅に戻るような余裕はないだろう。必要なものは現地で調達する。それよりこのプロジェクトに関する資料はどこにある？」

ひだまりちゃんが引き継ぎ書通りにファイルの片づけをしてくれていれば、キャビネットの右側にまとめて置いてあるはずだ。

予想通り片づけてくれていたようで、私はすぐにそのファイルを見つけて彼に差し出した。

それから印刷し終わったばかりの、私が作った資料も彼の手に渡す。

余計なお世話かもしれない。でも、これを使うも使わないも彼次第だ。

彼は訝しげに渡したのを見ていたけれど、すっと視線を上げて私を見た。

「これは？」

「差し出がましいとは思いましたが、私がつめたものです」

「……いつ作った？」

「各プロジェクトについては毎日更新しています。溝口さんには出勤されると同時に提

出していました」

「……君は——」

彼はなにか言いたげな表情をしていたけれど、それ以上言葉を発しなかった。

私はドキドキしながら、今度は専属秘書室のロッカーからスーツケースを取り出す。機内持ち込み可能なサイズの小さなスーツケースの中には、新しいシャツやネクタイ、男性用の下着や靴下、洗面道具に髭剃りまで一通り入っている。

サイズは溝口さんに合わせたものだけれど、大丈夫なはずだ。

「中身はすべて新品です。氷野さんの好みとはいかないでしょうが、誰もが使えるようにベーシックなものを選んでいきます。もしよろしければお使いください」

仕事にトラブルはつきものだから急な出張に対応できるように常に準備していた。

「氷野さんの好みを教えていただければ、次回からはそれを準備します」

彼は呆気を取られたように私を見た後、大きくため息をついた。それから無言でスーツケースの中身を確認していく。

「そうだな。次からは俺が指定する」

余計なお世話だと言われなかったことに、ほっとする。

「君は——どうしてそこまで俺につくの嫌がる？ 役に立たない秘書を送り込んだ挙句、未経験の元受付嬢をあてがってくるぐらいだ。俺のCEO就任を快く思っていない

いのはわかっていたけれど、ここまで嫌がられる理由がわからない」

「え？」

私は冷や汗がたらたらと流れるのを感じた。

『余計なお世話だ』と怒鳴られないだろうかとハラハラしていたはずなのに、今は別の意味でハラハラする。

——確かに私は彼の専属秘書につきたくはなかった。

溝口さんを尊敬して、追いかけて入社した身として、彼以外がトップに立つ姿を、間近で見たくないと思っていたのは事実だ。だからと言って、困らせようとは思っていないかった。

……え？ 他の秘書をつけたのを、嫌がらせだと思われているの？

ひだまりちゃんを抜擢したのは、癒しになればと思っただけから。

私はぶんぶんと首を横に振った。

……いや、いや、いや。

「私にそのような意図はありません。秘書課の他の子たちも仕事ができないわけではありませんが、専属秘書の経験もしてほしかっただけです。後任を育てるつもりでした。大川だって経験はありませんが一生懸命取り組んでいます」

そうだよ！ なんだか私が意地悪したみたいな話になってるけど、あんたが気に入ら

なくて数々の秘書を追い出したから、ひだまりちゃんになったんじゃない！と心の中で突っ込んだ。

「一生懸命、ね。他人に仕事をまわすのは上手だし、すべては君がやったと正直に伝えてくる素直さは評価できるが」

ひだまりちゃん……私は思わず遠くを見つめた。

どうして素直にそんなことを言うんだろう。自分の手柄にしたって構わないのに、そういうさがないところが、かわいいんだけど。

「じゃあ君に俺への個人的な感情はないということだな」

「は……い？」

個人的な感情ってなに!? と思いつつ、とりあえず肯定した。

それからついでに、ほほ笑んでみせる。

その時、プルッと内線が鳴って、私はすぐさま受話器を手にする。妙な空気を交えてくれた内線に大感謝だ。

電話を終えた私は、ビジネスモードな口調で彼に話しかける。

「飛行機の手配が完了しました。下に車をまわしますので、ご準備いただけますか？」

「とりあえず今後のスケジュールの調整は任せる。あとは追って指示をする」

「かしこまりました」

私は最後まで気を抜かないようにしながら、部屋を後にした。

* * *

あのあと、私はすぐに午後からの彼の予定をキャンセルし、別の日程に組み直した。

幸い、それほど重要度の高いものはなかったので、スムーズにできた。

今後のスケジュール調整は任せるという言葉質を彼から取ったので、私の思うように組み直すことができた。無駄なく効率よく、その上、休養時間も確保したのだ。

ついでに、急な予定変更のお詫びの品を送る手配もする。

留守中のプロジェクトの進行にも気を配る必要があるだろう。今回はなにせプロジェクト統括部長も同行してしまっただけだ。

私は久しぶりに秘書らしい業務を楽しんでいた。たとえ溝口さんの下で働けなくとも、トラブルが無事収束することを願いながらも、鬼のいぬ間になんとやらという具合に、

せつせと仕事をこなした。

「——で、なんとかなったわけ？」

立ち読みサンプル はここまで